

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：35408

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24792603

研究課題名(和文)子どもの虐待予防をめざした親支援ボランティア育成プログラムの開発

研究課題名(英文)Development of a parent support program that aims for prevention of child abuse

研究代表者

林田 馨(篠原馨)(HAYASHIDA, Kaori)

安田女子大学・看護学部・講師

研究者番号：10379688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：不適切な養育状況にある家庭を早期に発見し、子どもの虐待を予防するために、支援者に必要な支援の内容や方法を明らかにした。インタビュー調査から、支援者は、母子間の愛着や母子分離の適切性、養育家庭の養育力に影響する要因等に注目し支援を行っていた。また、親支援ボランティアに必要と思われる支援内容について、地域で子育て支援に携わる者を対象に、質問紙調査を行った。その結果、養育者に接する支援者としての適切な態度や行動について重要とする回答が多かった。

研究成果の概要(英文)：In order to find families under inappropriate nurturing status promptly and prevent child abuses, support contents and methods necessary for supporters were revealed. According to an interview survey, the supporters focused attention on mother-child affection, adequacy of mother-child separation, and factors that can impact family's nurturing capability to conduct supporting activities. Moreover, I carried out a questionnaire survey with people who were involved with regional child raising supports on the support contents required for parent supporting volunteers. As a result, the most common opinion was that right attitude and action as the supporter who contacted parents were important.

研究分野：公衆衛生看護学、地域看護学

キーワード：子育て支援 親支援ボランティア 子どもの虐待予防

1. 研究開始当初の背景

近年、テレビや新聞等で子ども虐待による死亡事件が数多く取りざたされ、虐待は大きな社会問題となっている。平成 16(2004)年 12 月に発表された「少子化社会対策大綱にもとづく重点施策の具体的実施計画(子ども・子育て応援プラン)」においても児童虐待防止対策の推進として、全市町村に虐待防止ネットワークの設置や児童相談所の夜間対応などの体制整備を全都道府県・指定都市で実施すること、訪問により養育家庭を支援する育児支援家庭訪問事業を全市町村で実施することなどが盛り込まれ、62.3%の自治体(政令市では 92.1%)が児童虐待の発生予防対策を充実させる等、関係者が対策に力を入れている。

しかし、そのような対策がなされているにもかかわらず、平成 25(2013)年度に全国の児童相談所が児童虐待に対応した件数は 73,802 件で、児童虐待防止法制定前の 6.3 倍にあたり急増している。広報啓発の取り組みなどにより、それまで気付かれなかった子どもの虐待が児童相談所に繋がるようになってきたと考えられる一方、虐待そのものが増えている可能性も否定できない状況にある。

親による暴力は子どもの心に深刻なダメージを与え、子どもの心身の健全な発達を損なう危険性が非常に高い。また、身体的虐待だけでなく、心理的虐待やネグレクト(育児の放棄または怠慢)、性的虐待が子どもに与える危害はトラウマ(心的外傷)となり幼少期・児童期に受けたトラウマにより精神障害や摂食障害、自傷行為の発症率が思春期以降に増加する。

これらのことから、既に発生している虐待ケースの進行や再発の予防ではなく、大声で叱る、叩く、泣いても放置する、言葉で傷つける等の不適切な養育をしている養育者への支援こそが急務であろう。また、不適切な養育の状況を早期に発見し、子どもの虐待を予防するには、広汎で長期・継続的な支援を必要とするため、専門職の他に、子どもの虐待の予防に携わる人材を確保する必要がある。そのため、養育者を支援するボランティア(以下、親支援ボランティア)の関わりや能力を明らかにし、親支援ボランティアを育成する

プログラムを検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、不適切な養育を早期に発見し、子ども虐待を予防するために必要と思われる関わりを明らかにし、親支援ボランティアを育成するプログラムを検討する。

3. 研究の方法

(1) 不適切な養育を早期に発見し子ども虐待を予防するための支援内容の抽出

地域で子育て支援に関わる支援者へ「不適切な養育があると思われるケースへの支援方法や内容」、「子どもの虐待予防に携わる者に必要な資質や能力について大切だと思うもの」、「子ども虐待の予防に効果的であった支援内容について」などについて半構造的面接調査を行った。さらに、調査の結果を踏まえ質問紙調査票の原案を作成し、内容の妥当性を検討するため地域の子育て支援の経験を 3 年以上持ち、大学院修士・博士の学位を有する大学教員 9 名に対して、パイロット調査を実施し、内容の修正を行い、質問紙調査票の原案を作成した。

(2) 不適切な養育状況にある家庭を早期に発見し、子ども虐待を予防するための親支援ボランティアを育成するプログラムの検討

(1)の結果を基に全国の自治体で子育て支援に関わっている支援者(非専門職やボランティアを含む)を対象に、「子ども虐待を予防する子育て支援ボランティアの支援内容について」の質問紙調査を実施し、子育て支援ボランティア育成プログラムの内容を検討した。

4. 研究成果

(1) 不適切な養育を早期に発見し、子どもの虐待を予防するための支援内容の抽出

対象者は、保健師 2 名、助産師 1 名、ソーシャルワーカー 4 名の計 7 名であった。

『子育て支援に必要とされるアセスメント能力』について、質的に分析した結果、【養育者の子育て力の背景を理解する】、【母子分離の状態を判断する】、【子どもへのかかわりがわからないために生じる現象を理解する】、【子どもの成長発達と養育者の関連を理解する】、

【愛着行動を判断する】、【家族形成過程における諸問題が捉えられる】の6 カテゴリーと、17 サブカテゴリーが導出された(表1)。

表1 子育て支援に必要なとされるアセスメント能力

カテゴリー	サブカテゴリー
養育者の子育て力の背景を理解する	養育者の基本情報を把握する 養育者の子育ての様子を把握する 養育者が生活するために必要となる能力を把握する
母子分離の状態を把握する	子どもからひと時も離れられない行動をする母親を把握する 子どもと離れた行動をする母親を把握する 育児によるイライラがみられる母親を把握する
子どもへのかかわりがわからないために生じる現象を理解する	子育ての仕方がわからない母親を把握する 偏りのある育児による生活習慣の乱れを把握する 母親の都合による生活習慣の乱れを把握する ネグレクトの危険性を把握する
愛着行動を判断する	母親に愛着行動のみられる子どもを把握する 母親に愛着行動のみられない子どもを把握する
子どもの成長発達と養育者の関連を理解する	子どもの成長と発達状況を把握する 子どもの成長発達に対する養育者の認識を知る
家族形成過程における諸問題が捉えられる	夫婦関係を把握する 夫婦関係が子どもに与える影響を理解する 核家族の状況を把握する

支援者は、この6つのカテゴリーの視点で不適切な養育や子ども虐待を予防するためのアセスメントの視点を捉えており、それらを整理すると、1. 養育者と子どもの絆の形成のあり方を捉える 2. 養育者と子どもの成長発達に応じた関わりの困難性を捉える 3. 養育者の養育力に影響する要因を捉えるの3つの視点に集約して捉えていることが示唆された。

効果的であった支援方法・内容については、内容分析の結果、【支援者としての心得を持つ】、【専門的機能の発揮】、【対象者の生活力へのアプローチを行う】、【ケースの見極めと介入を行う】、【産み育ての自立と自律を支援する】、【子育てしやすい社会構築への希求】の6 カテゴリーと、22 サブカテゴリーが導出された(表2)。

表2 効果的であった支援方法・内容

カテゴリー	サブカテゴリー
支援者としての心得	養育者を大切に思う気持ちがある 支援の理想を持っている ソーシャルワークの理念を遵守する
専門的機能の発揮	支援に必要な専門的知識を活用する ソーシャルサポートができる 支援周辺業務ができる
対象者の生活力へのアプローチを行う	対象者の生活力をあげていく 対象者自身の持つ力を高める
ケースの見極めと介入を行う	緊急性を見定めタイムングを見逃さず対応する ケースの重大性を見極めて対応する 関係機関と協働する ケースに継続的に関わる コーディネート機能を説明する
産み育ての自立と自律を支援する	妊娠期より支援を継続する 育児期の不安を軽減する方法を提供する 父親を[育児する父親]に育てる支援を考える 子どもと過ごす時間が楽しくなるよう工夫する ピアサポートを促せる 子育て支援プログラム等の教室を活用する
子育てしやすい社会構築への希求	検討課題を常に持ち続ける 支援技術を磨く努力をする 養育者に対する社会の許容範囲を広げる活動をする

効果的な支援方法や内容として、養育者を大切に思う気持ちや支援の理想を持つなどの

支援者の心得が見られた。支援者が、養育者の子育てに否定的な言動や養育者自身の子育て観の押し付けにより、養育者は心を閉ざし、支援を受け入れることやめてしまうこともある。支援者は養育者との支援関係を構築していく必要がある。さらに、養育家庭が抱える問題も多様であり、対応が困難な場合も多い為、コミュニケーション技術の習得や、精神疾患を持つ母親、発達障害の子どもを支援するための知識など、様々な専門的な技術や知識を持ち、それを発揮することの必要性が示唆された。また、ネグレクトの疑いのある養育家庭では、養育者の知的能力や他者との交流などの社会的能力が乏しい場合が多く、生活習慣の乱れや、大切な書類の手続きができないなど、生活力が低い場合がある。そのような養育者に対しては、生活していく上で困難な事柄に対して援助していくなど養育者の生活力を高めるアプローチを行っていくなどの必要性が明らかとなった。

子どもへの虐待が疑われるケースでは、その緊急性やタイミングを見極め、関係機関と協働し対応していくことの必要性も語られた。

子育ての伝承が困難な核家族化や少子化の現在では、母親は育児によるストレスや困難感を抱えやすく、うつ状態やその傾向を伴う者も少なくない。そのため、妊娠期から養育者と支援者とのつながりを作ることで、出産後、養育者が支援の受け入れを容易にし、育児や生活上の相談をおこなうきっかけを提供することが可能である。きょうだいの世話など子育ての経験に乏しい現代の養育者の世代では、子どもの問題行動やしつけに悩む者が多いことから子育て支援プログラムなどの機会を活用し、子育ての技術を伝える他、育児の悩みを抱えた養育者同士で、問題の解決策を相談、助言するなど、ピアサポートとしての機能を発揮できるよう支援することも必要である。

子育てしやすい環境を構築するために、養育者個々に応じた柔軟なプログラムや地域で子育てを支援できるシステムを考え、検討課題を常に持ち続けることも支援者として必要である。

また、支援技術を磨くために、困難ケース

の支援方法を他の支援者の意見を聴き活用する、トリプル P や CAP などのペアレントプログラムの研修会に参加するなど自ら自己研鑽に努めることも必要である。

(2) 不適切な養育状況にある家庭を早期に発見し、子ども虐待を予防するための親支援ボランティアを育成するプログラムの検討

研究協力の得られた対象者は 80 名(回収率 43.0%)であった。平均年齢は 42.4 (Min23 -Max65)歳、所有資格は、保健師 55 名(68.8%)、看護師 37 名(46.3%)、保育士 9 名(11.3%)、養護教諭 8 名(10.0%)、幼稚園教諭 7 名(8.8%)、助産師 6 名(7.5%)であった。

子ども虐待を予防するための親支援ボランティアに必要となる関わりとして、養育者への態度に関係する項目で「重要である」と回答した者が多かった(表3)。一方、子育て支援に関する専門的知識や技術を習得すること、養育者との関わりの中から養育者の基本情報を把握すること、養育者同士のピアカウンセリングを支持すること、養育者自身がサービスを選択できるように支援すること、養育者の緊急時の見定めなどでは、「重要ではない」と回答した者や「ボランティアには困難である」と回答した者が多かった(表4)。

親支援ボランティアへ期待する役割として養育者の話を傾聴・共感する。身近な相談者として関わる。見守り。などの回答が多かった。だが、守秘義務の遵守や養育者への受容と共感については、親支援ボランティアに行きたくて欲しいという課題も伺えた。

これらのことから、親支援ボランティアの役割として、地域の養育者を見守り、身近な相談相手となり、子育ての方法を伝承・アドバイスを言い関わる中で、不適切な養育状況にある者を掘り起こし、必要な支援機関につなげることは期待されているものの、子育て支援に関する専門的な知識や技術を習得したり、養育者自身がサービスを選択できるように支援していくなど、不適切な養育家庭に一步踏み込んだアプローチや支援については困難と考えている者が多いことが明らかとなった。

表3 親支援ボランティアに「重要である」と考える者が多かった関わり

項目	Mean±SD*
養育者に対してあたたかく接することができる	8.3±0.3
養育者に対して誠実である	8.3±1.3
養育者の秘密を守る	8.2±1.8
人を思いやる気持ち(コンパッション)を持つことができる	8.2±0.9
養育者のしんどさなどの気持ちに寄り添った対応をする	8.2±1.0

*「最も重要である」=9、「まったく重要でない」=1とした。

表4 親支援ボランティアには「重要でない」と考える者が多かった関わり

項目	Mean±SD*	困難と回答した者(%)
子育て支援に関する専門的知識と技術をもつ	5.0±3.2	30.0
養育者の基本情報(成育歴・家族背景・不適切な養育に至った経緯や性格・気質、サポート状況等)を把握する	5.4±3.4	30.0
養育者である母親どうしのピアカウンセリングで解決するよう支援する	4.5±3.1	28.8
養育者自身がサービスを選択できるようにする	5.1±3.1	25.0
養育者の緊急性を見定めるなどタイミングを見逃さず対応する	5.5±3.3	25.0

*「最も重要である」=9、「まったく重要でない」=1とした。

市町村におけるボランティア研修の実施内容は、「母親への関わり方について」、「子どもの心身の発達について」、「子ども虐待とその支援について」などがあつた。「母親の関わり方について」は、精神疾患および既往のある母への支援、コミュニケーションを生かした支援方法や世代間による育児観の違いなどの回答が得られ、母親の基本的な背景や生活状況は多様であるため個々のニーズを把握した上で関わる必要がある。「子どもの心身の発達について」は、遊びについて、事故・怪我・病気などの対応、発達に合わせた養育者の関わり方、発達障害について、療育教室について、などの回答が得られた。子どもの発達段階に応じた手当や救急処置の方法、関わり方、遊びなどを把握することや子どもの障害とその支援方法についても把握しておくことが必要である。また、子どもの支援のための社会資源の種類や連携方法などの回答が得られた。ボランティアに関しても支援のために社会資源を把握し、養育者と支援機関をつなぐ役割を期待されていることがうかがえた。さらに、ファシリテーション研修やコーチングに関する講座を実施している市町村もあり、ボランティアに子育て支援や虐待の予防を目的としたプログラムのファシリテータなどの役割も期待されていることが示唆された。

先述した親支援ボランティアには、専門的な知識や技術の習得や養育者同士のピアカウンセリングで解決するように支援することを困難としていたが、一部の回答ではボランティアの研修としてファシリテーションやコーチングを行い、ボランティアが主体性・自発

性を持ち養育者に関わりを持つことを支援している状況が見られた。

したがって、親支援ボランティアは、子ども虐待の予防のために必要となる研修を受け、不適切な養育状況や虐待のリスクのある者に関わっていくことは可能という意見もあるが一方で困難とする意見もあるため、さらに詳細な検討を続ける必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

林田馨、Triple-P Study Tour 2012 子どものメンタルヘルス対策と虐待予防のあり方を求めて、キャリアと看護研究 3 巻 1 号、2013 年、143-151

林田馨、乳児虐待のリスクのある母親の背景要因と養育環境の実態、看護・保健科学研究誌、14 巻 1 号、2013 年、109-115
Kaori Hayashida, Mikiya nakatsuka Promoting factors of physical and mental development in early infancy: a comparison of preterm delivery/low birth weight infants and term infants, Environ Health Prev, 19(2), 2014, 160-171

Kaori Hayashida, Fumiko Tsuma, A Study on the Content of Effective Support for Child Abuse Prevention Extraction of assessment items necessary for childrearing supporters, インターナショナル Nursing Care Research, 2016, 15(1), 1-12

[学会発表](計2件)

林田馨、乳児虐待のリスクのある母親の背景要因と養育環境の実態、第 19 回日本子ども虐待防止学会学術集会、2013 年 12 月 13~14 日、信州大学(長野)

林田馨、津間文子、子ども虐待予防に効果的な支援内容に関する研究-子育て支援に関わる専門職に必要なアセスメントの項目の抽出、第 35 回日本看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 5~6 日、広島国

際会議場(広島)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1)研究代表者

林田 馨 (HAYASHIDA KAORI)

安田女子大学・看護学部・講師

研究者番号：10379688